

ねらい

- 施設を貸す、管理職や1年生担任が入学前後に情報を交換する程度の関わりから、架け橋プログラムの意義を考え、保育参観とその後の合同研修会を実施し、幼保小の教員同士が互いの教育を知り合う関係性を築いていく。

ポイント

- 小学校は、午後の授業をカットし、小学校全教員が幼稚園の保育を見る体制を整えた。幼稚園は、子どもの個別の課題や予想される活動をまとめた幼稚園の指導案などを準備し、保育参観に臨んだ。
- 合同研修会は、架け橋コーディネーターを招いて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と保育での子どもの姿について学び、幼児期の保育について理解を深めたいと考えた。

実践内容

＜準備＞

保育指導案、個別の課題シート、予想される活動シートをみて、保育のポイントを理解するようにした。

＜保育を見る＞



自由に遊んでいるだけに見える。
どういう視点で参観したらよいのか…？



みんなでしている活動に参加しない
子どももいる。どうするんだろう？



実際に保育を見ると、保育を見る視点が分からず戸惑った教員もいた。みんなでする活動に参加しない子どももいて、保育者はどうかかわるのだろうか？と疑問をもった。保育者はクラスの子もたちに「皆で一緒に楽しむにはどうしたらいいか」を問掛け、子どもたちは自分

で考え、みんなで活動するための方法を共有し、それにより達成感を感じていた。保育者が「入りなさい」と促すことなく、楽しそうな雰囲気や、笑顔で、子どもを自然と活動に誘っていく様子は、小学校の教員には新鮮だった。

＜事後研修の実施＞

前半は、学校指導課架け橋コーディネーターによる架け橋プログラムについての講演を聞き、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と本日の保育の子どもの姿を照らし合わせて学びを深めた。後半は、幼保小の先生がグループに分かれて、小学校教員と保育者との子どもへの関わり方の違いなどを協議した。保育者は、子どもへ指示するのではなく、「どうしたらいい？」と子どもの考えを引き出す言葉が中心であることや、保育者の一人一人の子どもに応じた関わりは、入学後の子どもたちへの関わりに生かすことができることを学んだ。



成果と課題

初めて保育を参観する教員が多く、幼保の保育を知る第一歩となった。また、幼稚園の環境と小学校1年生が入学後に過ごす環境のギャップも感じた。今後、保育参観に関しては、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を中心に参観の視点を定めて行いたい。また、子どもたちが安心して主体的に学べる環境や教師の関わりについても学んでいきたい。

始まったばかりの幼保小の架け橋プログラムの取組であるが、今後は、幼保小互いの保育・授業の参観や事前、事後研修、子ども同士の交流など、進めていきたいと考える。